

統一



第百八十九號

明治四十三年十一月十五日(每月一回十五日發行)

(東京) 三島印刷株式會社印刷

本 號 目 次

佛教の女性觀(其二)

大 僧 正 本 多 日 生

日蓮聖人の博愛主義

文 學 士 小 林 一 郎

佛教の道義

僧 正 野 口 日 主

報 道

法華經講義集

(自九五頁) 大 僧 正 本 多 日 生

佛教の女性觀(其二)

九月十六日妙教婦人會に於ける講演(熊井本光筆記)

本 多 日 生

前回にも佛教の女性觀に就て。聊か所見を申述べて置きました。今回もその續きとして女性觀をお話し致そうと思ひます。前回に申上げました通り。女子の位置や資格を明かにして。その自覺を喚起すると共に。社會の風潮を改善する事は。單に女子の利益に止まらず。人生を圓滿に發達せしめんとするには。重大なる關係をもつて居る。極めて大切な問題であると信じます。女性問題は諸種の方面に就て。盛んに研究討議されて居るやうであります。佛教の女性觀に就てその實態を發揮した人の見當らないのは。甚だ遺憾の事と思ふのであります。

女性觀の當否は宗教の死活問題であります。佛教の護法政策から見ても。女性觀の實義を光顯することが。緊急切實の大問題であります。宗教が婦人を敵にする

如き解釋を存するは。極めて不利益のことと思ふ。從來の佛教家は甚だしく婦人の惡口を言入居るが。割合に婦人の反對の少なかつたは。勿希の僥倖であつて。若しも今後に於て斯かる舊套を存續するならば。必ず將來教育ある婦人よりの反對を受けて。佛教と婦人とは絶縁する事になると思ふ。女はオナゴリと云ふて惡業の結晶體であるなど。よく佛教徒の口から聞かされたものです。果して佛教がかゝる侮蔑を女子に與ふるものと云ふに。斷じてそうではない。丁度反對に女子の爲めに信仰の美德を認めて。壓迫を拂ふことに努めたが佛教の實態である。

近頃發行された婦崎博士の根本佛教と云ふ著書の中には。小乘佛教の見地として。婦人の事が記述せられてあります。佛が女子特有の惡徳を數へられたは事實なるも。その主意は出家の比丘の用意に資する爲めと。又婦人に反省を促して修養に志せしめん爲めであつて全く佛陀の慈悲に外ならぬ。博士はこの二點の主意を説明して。その結果は婦人に傑出せるものありしを證

し。信仰に於て男子に勝れし善生。布施慈善を行ひし鹿母毘舍佉。多聞強諍の聞へ高かりし久壽多羅。慈心に富みしサーマーワデー。禪定に長せし優多羅。病者看護に勉めし須毘耶等。敬重すべき婦人多々ありしを説き。これ等の事蹟を明かにするを得ば。婦人の活動の如何に麗はしかりしかを知るを得んと記述されてある。

佛陀が女子特有の惡徳として數へられしは。貪欲、疎懶、調戲の三であつて。女子は男子よりも慾心が強い。懶け勝ちのものである。良夫が留守になれば日中でも惰眠に耽ける。又調戲と云つてからこゝろ様のことや。不真面目なことが多い。朝は目覺めるや嫉妬の心を以て苦しみ。日中には疎懶にして睡眠に耽り。日暮には諸の欲望を起して自ら纏縛すると云ふのでありますが。佛出世の當時に於ける印度の女子は或は斯かるものが多かつたかも知れぬが。今日我國の如き教育普及の女子は決して斯かる愚なものでない。之に反して男子の罪惡を見れば。決して斯かる女子

ある。若しも人類の過半を占むる女子を救はなければ。大乘と名づけることは出来ないのである。大乘の女性觀としては。無垢賢女經(大藏第二十卷)に「於大乘法。無男無女」と説かれてある。又樂瓔珞莊嚴經(大藏第十卷)に「その時には是の女神力もて身を化す。三十二の盛壯なる男子の如く。端正なる妙色白淨鮮潔に威徳第一なり。種々の瓔珞を以て自ら莊嚴し已つて。大徳須菩提に語る。斯の如き色身を以て女人を調伏せんと。須菩提の言く汝今是れ女か是れ男なりとせん耶と。答て言ふ大徳須菩提汝是れ凡夫か是れ學なりとせん耶と須菩提の言く善男子我は是れ凡夫に非ず亦是れ學に非ずと。即ち後答へて言ふ我も亦是の如し男に非ず女に非ず」と。この兩經文を見よ。男女の區分を存せざる所に大乘の妙旨を示めされて居る。玉耶女經(大藏第二十卷)にも「大乘教無男無女」と説かれてある。離垢施女經(第四ノ一三五)には離垢施女と目連尊者の愉快なる問答がある。「大目連離垢施に問ふ。汝族姓子よ慧を建立し無上正眞道意を發してより以來久遠ならば。何を

の罪惡如きの輕いものでない。餘程恐るべき特殊の惡徳を有つて居る。それは第一殺人罪にしても。五人殺や首無し事件が絶へないが。何れも男子の犯罪である。放火強盜詐欺等重罪に於ては。何れの監獄も男子によりて満たされて居る。されば如何に比較しても女子が男子よりも特に罪惡に満ちて居るとは云はれまい。而して前に擧げた貪欲疎懶調戲の三つでも。畢竟社會制度の上より馴致したので。決して女子先天の罪惡として見ることは出来ぬ。又女子に隱忍の性質が多いやうであるが。これも社會の壓迫が強いから來るので。僧侶などが社會の冷遇に遭ふて隱忍の性を帯びて居るが。これ皆先天の惡徳でない事が分かる。斯かる觀察は予一人の觀察であつて。佛陀の教とは全然相反するが如く思ふ人もあらん。是れ思はざるの甚たしきものであつて。佛敎大乘の教へは到處に己上の所見を證明して居るのである。

大乘と云ふは一切衆生を平等に濟ふ上より名を附たので。如何なる衆生も悉く之を乗せて彼岸に渡るのである。以ての故に女人の身を轉せざる。離垢施答へて曰く。世尊仁を神足最尊と歎じ給ふ。卿何を以ての故に男子を轉せざる。目連默然たり。離垢施曰く女身及び男子の形を以て正覺を速成せず。この問答の内に如何に女子の尊嚴を示めせるかを見よ。又大涅槃經に男女の定義を形の上より見ないで。精神の上から見られたことがある。形は女人であつてもその實男子なるものあり。形は男子であつても其實女人なるものありと説かれて居る。男子に中々グーメラの者が澤山ある。女子にして男子の懶づべき精神行爲の人が決して少なくない。彼の世襲の財産を蕩盡する不省兒は男子の方が多いためであるから。寧ろ男子の方に大々の痛棒を加へてやらねばなるまいと思ふ。この涅槃經の意義を一層強く教へたのが法華經である。法華經には人間會と云ふ妙教が説かれてあり。法華經に於ては不成佛の衆生として斥はれたものも。法華經に來りては悉く絕對究竟の地位に到ることを許されたので。選舉權を得た位の悦びではない。女人成佛

と云ふ一旬は。最大最善の性徳を具へて居る事を。絶對に許されたのであるから。如何なる女子でも成佛し得ると同時に。其地位は最も高く見られて居るのである。之を人間會と申すのである。

此の如く大乘は男女の區別を根底に於て認めないことになつて居る。さればとて家庭の内に於て。時には男子が主人公となり。時には婦人が上座に坐はるなどと云ふのではない。そんな些細の事は各國各地の風俗習慣に隨つて。如何様にも定め得らるべきである。宗教上の信仰に於て本尊の前に立つ場合には。男女に於て差等はないものである女子を徒らに卑下せしめ。高野山の女人堂のやうに。本堂に參詣も許さないと云ふことは。將來全然不可である。古來かやうな例の存せしは山中の僧侶の道念微弱にして。婦女の爲に品性を墮落せしむる懼れがあるから。女人の登山を許さなかつたものと思ふ。今後の女子たるものは漫りに自ら卑下することを止めて。一面には女子の責任を自覺し。克く其本分を盡して戴きたい。それで斯様な問題は法律の上

よりして。同權だの自由だのと云つて解決を計るべきものでない。必ず宗教上の温かさ精神から完全なる解決が定まつて來るのである。

男女の行爲は異つて居つても。畢竟同一目的に達する二方面に過ぎないものであるから互に相倚り相待つて社會をして圓滿に發達せしめなければならぬ。この人生には女子の力に待つ所は甚だ多大であります。玉耶經には七婦の類別を列擧してあるが。最後の二婦人は。男子にとつて敵とも云ふべき女房と。良人を墮落せしむる女房とであるが。他の五人は皆良人をして向上發展せしむる内助の美德ある婦女であります。或は子の父に對するが如く夫に事ふる婦人。或は兄弟の相誘掖するが如き精神の婦人。或は親友の如きもの。或は又良夫の留守中にでも所用を辨じ夫の交際をして圓滑ならしむる如きものである。この玉耶女經から考へても女子は多くの場合に尤も大切なことが解かる。又他の經に朝夕六方を禮拜するときには。妻子をも拜すべしと云ふことを説かれてある。初めに奉讀した御書の

「矢の走るは弓の力。雲のゆくは龍の力。男のしわざは女のちからなり」と仰せられたのは。内に賢良の妻女ありて後顧の憂へなからしむることが大切で。男の世に立つて外に活動する力は。全く女子の内助が最大なる關係を持つのであります。又男を柱に女を桁に喩へ。又男を足に女を脚に喩へ。何れが缺ても用を爲さぬと云ふことをも懇々教へられてあります。さればこの方面からも女子の位置の尊きことを認めねばなりません。單俗な言ではあります。釋迦も孔子もヒョーイと「生む」と申すことも。誠に力ある真理を含んで居ると思ひます。この方面からも女子の位置を認めねばならぬ。女子は良人に事へ家を齊へ兒を育てる上に。充分の注意と努力とを要するは無論のことである。

更に方面を轉じて女子の勇氣と智力とに就て少々お話ししようと思ふ。世人は女子には勇氣が乏しいものと相場を定めて。女子は火事にでも遭つたならば皆鍋の蓋を持って狼狽するもの計りと思つて居る。之は甚しい誤謬の觀察である。或る商家の主婦が東京では夫は常

に外出勝ちであるから。火事などの突嗟の場合には役に立たぬ故。總て私が處置する事になつて居ると申されたが。嘗に東京のみではありませぬ。生存競争の劇しくなつて行く今後の社會には。かやうな方面にも女子が勇氣を要するのである。予の處で或者が洋燈を顛覆させ火が燃へ擴がつたから周章へて舉措を失つて居た。然るに女中が見て心靜かに何の騒ぎもせず。火鉢の灰をおかけなさいと呼はりつゝ。自から灰を取り來りて消し止めたことがある。されば世間で云ふように女子は臆病なものではない。随分勇氣のあるものも多い。又有つて欲しい。併しお轉婆では困る。表面は柔順で内に沈着ある勇氣が望ましいものです。先頃遺囑された佐久間親長も。其の瀕死の際に至るまで遺族を憂慮して居られたことは。遺言書に在りて明かな事實であります。實に婦人の確乎して居ると否とは。男子の活動の上に至大なる影響を及ぼすのであると思ふ。妻さへ確乎として居れば従つて子供の事も心配が少ない。昔の武士の妻などは確かりして居つて。不慮

の場合に處する覺悟を極めて居た。將來膨脹發展する我國の婦人は。この勇氣の養成が甚だ必要であると。思ふ。而して又決して不可能のことでない。

之に就て三摩羯經を見まするに。佛陀が或る時舍衛國の給孤獨園に居られました。隣邦の難國王が佛法を信せず外道を奉じ。勢力に頼みて國中の佛教徒を迫害した。且つ自からは婆羅門を奉ずるが故に智慧第一なるを得たと云つて。太鼓のやうな腹を示し。我が腹の大きなのは智慧が充滿して居る所爲である。若し破れたら智慧が漏れて出ると云つて。鐵の帶を締めて居りました。時に其太子が妃を迎ふる年頃になつた。國中には適當な女子がない。乃て使を派して舍衛國に妃とすべき女子を覓めさせた處。阿難如來の娘に三摩羯と云ふ美人がありました。使を以て結婚を申込んだ。然るに其父は使者の黒奴が鬼のやうな恐ろしい形貌をして居るのを見驚いて彼のやうな國へ嫁に遣ふことは忍びない。が若し嫁に遣らないと兵を起して國を奪はれるに極まつて居る。如何にしたものかと大に心配を

したが。三摩羯は妾は佛法を信じ奉つて居るものであるから。婆羅門を拜しないとして一向承知しない。母を通して申し合せて貰つても聽かない。であるから外道は益怒る。若し禮拜しなければ汝の妃を殺すのみならず城をも攻め落すぞと。王室までも威しに來た。其でも三摩羯は畜生には禮拜することは出來ない。其よりは先づ汝等は行儀を改む風習を改善せよと云つて。頭として應じない。外道は愈々教徒を驅り集め雲霞の如く城に攻め寄せて來た。時に三摩羯は心にみ佛を念じて言ふやう。妾の力の有らん限りは既に竭しました。此上外道の蜂起を如何にいたしませう。願くば佛御力を與へ給へと祈りました。佛は神道力を以て其狀態を御覽せられ。直ちに御供を具して救援に赴かれました。此方の婆羅門等は佛陀の行列を望み見ると。先頃同教徒を酷く責め懲した小僧が列末に御供をして來る。彼の強力の小僧が猶列末にある位であるから。他の人々はどれ程強いか知れないと云つて。威風堂々の行列を見て陣前既に士氣沮喪の有様。折柄一天掻き曇つて般

して。遂に佛の所に詣て示教を請ふた。處が佛陀は別に見給ふところがあると見え。嫁に遣つた方が宜かろう。三摩羯が往けば必ず彼の國に佛道を宣傳するであらうと仰せられた。されば父も其氣になり娘も決心しまして。佛の仰せに従つて嫁ぐことに定めた。愈々嫁つて見るとさても。其國の風俗と云ふは。人は皆裸體で見るとさうに戰慄するやうな事。其上國中到る所婆羅門教徒であるから。王室の慶事を奉祀する爲め。全國の僧徒を城下に集め。神前に祭典を行ひ。新妃は祭場に詣でて禮拜をしなければならぬことになつた。外道の祭は犧牲として豚などを殺すので實に蠻的なことをやる。其時に三摩羯が申すのに。妾は左様なものを禮拜することは出來ない。其の理由は第一人にして裸體なるは不作法の極。大畜生とも擇ふ所はありませぬ。妾は一見して唾でも吐きかけてやりたく思ひますと云つた。之を聞いた外道は皆大層立腹しました。太子は驚いて其は然であるうが。此國は外道に道ろうと一國の治安に係るから曲げて禮拜せよと種々と慰撫致し

々轟々百雷一時に鳴り響いた。斯うなつては如何に外道でも堪らない。總勢忽ち降伏して佛前に詣り。即座に佛陀の説法を拜聴し奉つて。翻然舊弊を改め。遂には國王太子までも佛道を遵奉するやうになつたのであると説いてあります。此等は佛教に於て女子の必ずしも孱弱ではない事を説かれた一例であります。

又此外須摩提女經にも同じく婆羅門徒の蜂起した時「我雖女人志剛不可屈」と云つて居る。恐くは同經異譯なのでありませうが。汝等は妾等を孱弱と婦女だと思つて居るが。汝等におめ。屈伏するものではないと斥け果せた事が説いてあります。而して此の勇氣は信仰に依つて確かに養はるべきものである。世の中に氣の弱い人によく心を鬼にして成せよと云ひます。何も強いてそんな鬼にせなくとも。健全なる信仰に依つて充分に勇氣は得られるのです。宗祖の當時。女子の身を以て山を越え荒海を渡つて。心細かるべき獨り旅路に遠く佐波の雪中を見舞ひ御威に與かつた女姓もある。斯様な勇氣は即ち信仰を以て得たに外なら

又四條金吾殿の主人江馬殿の御勘氣に觸れんとし
て。躊躇逡巡して居られた時。合室は法華經の爲に
は乞食になるも何の厭ふ所かあらんとて。良人を罰さ
されたが如きは婦人としては。男子にも得難き勇氣決
心ではありませんか。以上の如き次第でありませうか。
女子を抑壓して弱い者と定め。女子も亦引込み思案の
みしてはいけない。益々之が開發誘導に盡されんことを
希望する次第である。

次に女子の知的能力に就ても一寸申して置きたいが
古來「女賢くして牛買ひそこなふ」との俚諺がある。
こは甚だ美しくない言葉で。先づ女子に對しては女子
も賢明になり得ると云ふ考へを起さねばならぬ。頭か
ら女子を愚痴なものと定めるは甚だ悪い。之に就ては
用上女經には立派に智慧第一と稱せらるゝ舍利弗や
文珠をやり込めた話しがあり。其外にも實例は澤山あ
る。轉女身經にも甚だ愉快な話がある。其は舍利弗は
賢いと云ふが。一體其智慧は本來ある智慧か又は修行
して出來た智慧かと問ひ。舍利弗が答へに窮したるや。

ふ理のみを證得して居らるゝためでなく。衆生を見て
直ちに慈悲の光を放ち根底から救ふてやらうとの思召
からである。佛門に入りて空理だの中道諦を學んだた
め。却つて冷たい精神となつて。人生を輕視するやう
な智慧を作つては眞に悲しむべきことである。されば佛
教には智を説くに神々の性質が合されてあつて。慈悲
智と云ふは人として感みの心を持たなければ愚者であ
ると教へ。人の爲めに施しをするを能施智と云ひ。如
何程學問しても物事に堪へ忍ぶことの出來ないやうで
は。何の役にも立たぬから之を忍辱智と説き。又安樂
智と云ふがあつて人の煩悶の原因を除くを智慧と云ひ
或は歡喜智と云ふがあつて隨分學問しても喜悅を持た
ぬは愚者なりとし常にツンケンして居る者を諷められ
て居る。此歡喜智は殊に現代には必要なりと思ふ。個
人としても社會としても。鐵と鐵と相軋り合うやうな
状態では甚だ心細いのであります。體て其處からは着
き火花が散るに相違ない。慙る間には宜しく護謨輪を
填めて調攝を施し。齒の浮き上るやうな軋りを止めぬ

又文珠に對しても銳利な問答をして苦しめて居るが。
此の外にも理論を以て男子を相手取り。ものゝ美事に
やり込めて居る女子は珍しくない。法華經提婆品の龍
女の話も。龍女は理屈を争はないで理を蹴つて立ち以
汝神力一觀我成佛」と呼ばはり論より證據を示した。
此等は全く凡智を超越した大智とも言ふべく。區々た
る理論を糺り合はない之を蹴つてしまつたのである。

此の理智に就ては現代の人は誤解して居る點がある
普通智と云ふは科學的の推理や判斷などの冷たいも
のゝみを指すやうであるが。そんな冷たいものでなく
最少し温かいものあるべきで更に清らかなるものでな
ければならぬ。法律を學ぶやうの冷かなものではある
まい。佛教では之を般若と云ふが之は全く徳の加味さ
れた智慧を云ふのです。唯理の一方を見て諸法は空寂
なりと考へる智慧ではなく。其中に必ず慈悲のやうな
温かきものが渾入せらるべきである。中庸には省知と
か聖知の語を使つてあるが善い文學であると思ひます
一體佛陀を尊敬すべき所以は。但だ空とか中道とか云

ばならぬ。社會や人々の間にも心から歡喜の水を湛え
温かき調和を計りて愉快の人生を作り出し。悦びの中
に進歩發展を見るやう緩和の方法を施さねばなりませ
ぬ。

佛は「歡悅を以て明知に従ふ」と云はれたが。賢明と
歡喜との調和でギシ／＼せず常に悦びを湛え。而して
この愉快なる心と賢明の心とが合して進むのである。
さてこの間の平和は必ず女子の力に須つべきであると
信じます。佛陀の境界には女子はないが又男子と云ふ
もない。現社會のやうな殺伐なものではない。鐵と火と
の如き恐ろしさのものではありませぬ。慙る次第である
から眞の知とは賢明と喜悅と相合すべきものである。
壽量品の信仰に安住する心は。妙心と云つて歡悅と明
智との融和された妙處を言ふので。等覺の大菩薩も衆
持の如き愚者も共に入らるゝ妙處であります。賢者
は入るとか出來るが愚者は斥はるゝやうでは。妙處に
到達しない宗教である。故に壽量品には佛弟子を呼ぶ
に善男善女と區別を立てず。たゞ善男子と仰せられた

これは注意せねばならぬ。されば法華經は爾前小乘經の如く極端に女子を排斥せず。男女共に眞價を認めたる經であります。

公平なる思想を以て女性觀は定めねばならぬ。女子は内を齊へ。男子は外に活動すると云ふ分擔の任務は。國國民情に依て相異なる事であるから。今茲には一々些細なことは固定した教を立つる必要はありませぬ。大體の解決さへ定まればそれでよいのであります。我國の現狀に就ては婦女の徳性を調整啓發することが尤も急要と思ふ。この模範としては提婆品に實例を示されてある。女子の代表であるから決して馬鹿は出してない智恵利根である。些の缺點なき婦人を出されて居る。

上來述べ來つた如く。女性觀の眞意義を發揮せられた法華であるから。心ある女子は自己が之を信するに止まらず子孫にも寶典として傳へねばなりませぬ。然らば自身は申すまでもなく。父母祖先の靈を救ひ。更らにこの妙教の信仰と理想とが。廣く社會に及で思

想界を導くならば。小は一國より大は世界の文明をして健全に發達せしめ得るのである。諸姉さんの信仰の益々進みて。この妙教の信仰と理想との發揮に力を添へられんことを切に望む次第であります。(完)

高山樗牛博士全集の一節

兎に角諸君は日蓮研究會を起さる可らず、蟻のために十年を費したる學者あるに非ずや、日蓮を研究するは日本歴史の寶庫を握る也諸君の生國の榮光を覺る也祖先を通じて諸君自からの名譽を増す也何より貴さは是の偉人によりて吾人の未だ知らざる人生の大意義の覺悟に到達すること也、即是れ他を研究するに非ずして自らを修養する也

日蓮聖人の博愛主義

(十月廿二日東洋大學講
香會秋季大演說會講演)

帝國大學講師 小林一郎氏

此問題は從來何人もあまり言はぬ所のものであつて予も亦之れに關する多くの研究を持たぬから、今言はんとする所は、勿論此問題の結論ではなく、僅に問題の提出に過ぎないかも知れぬ、たゞ大膽なやうであるが、且らく此問題を提出して置いて、更に研究する所あつてまた後日之れが結論を得る所あらんと希望するのである。

予は生來臆病であるのか、どうも闇黒の中に居ることが厭でならない、昨夜も深更不圖目を醒ませば、燈火滅して室内眞闇となり、四隣閑として萬籟靜である、慄る時に何とはなしに死と云ふことを考へるのが予の常である、果然昨夜も想此に及び、徹曉死の問題を考へ通した、思ふに人の死様は、其性質と一致する點があるらしい——其人の偉大なる否とを謂ふのではな

い——古人に就て考へて見るに、孔子の死際は極めて平穩であつたやうだ、從つて吾人は別に何の感動も受けない、ソクラテスの死際は、非常に立派であつたと思ふ、但しソクラテスは非常な賢者であつたに相違ないが、又中々理屈つばい人で、常によく人の上げ足を取る人であつた、死ぬる時まで上げ足を取つて居る、其將に毒杯を仰がんとするに際し、弟子が先生は罪なくして此刑に遇ふかと、悲み泣いたに對し、然らば汝は吾が罪あつて刑を受くるを望むか、と皮肉を言つて居る、從容死を恐れずと云ふ風が偲ばれて、亦太だ學ぶべきに似て居るやうであるが、吾人はあまり不眞面目で、懐かしくないやうな氣がする、耶蘇は亦頗る奇抜な珍しい死様をして居る、全く耶蘇的だ、其捕へられてからは、別に騒ぎもせず黙つて死に就いた處は、流石に立派であつた、如何に立派であつても、ソクラテスや耶蘇の死様は皆人に眞似の出來る所のものではないが、釋尊の死際は最も立派で、最も目ざましく、而して最も皆人の手本になるものであつた、之れ

を以て、四聖何れが優れると云ふことは、勿論論ずべきではないが、其生涯を通じての活動、殊に其際に立派な教を遺して、瞑目した處は確かに他の三聖と異なる點で、或は是に由りて其人格の一斑を窺ひ得べきであらう、吾人は死際を善くすると云ふことが唯一の希望ではないが、願くば其惡るからんよりは其善からんことを望まざるを得ない、然らば、日蓮聖人の死様は如何であつたかと云ふに、釋尊の聖がそつくり當て欲まると思ふ、寂を池上に示された時、懇々と弟子に説法し、且つ遺言して死後の布教を托し、安詳として逝かれた處などは、正に沙羅林の佛涅槃を再現せられたかの感がある、之れを孔子に比して精采あり、之れを耶蘇、ソクテラスに比して奇矯でない、蓋し亦聖人の人格を現はして居ると思ふ。

世日蓮上人を以て、或はマホメットに比し、或は耶蘇に比するが、マホメットに較ぶるのは全く論ずるの價値がない、之れを耶蘇に比するは僅かに聖人の一部分を見得たに過ぎない、全体から見て言ふならば、聖

英國のバークであつたか、大山は泉に富み、大人は涙多し」と言つて居るが、蓋し至言である、人の豪い豪くないと云ふことは、或る意味より謂へば、涙に富んで居ると涙が乏しいと云ふより來ると言はれよう涙を以て人に接すると云ふことは、即ち多くの人を容るゝと云ふことに外ならず、多くの人を容るゝと云ふことは、即ち自己を大にする所以である、否な自ら大ならざれば、よく人を容るゝことは出來ないのである日蓮聖人は實に涙の人であつた、渾然として主角なく、大なること虚空の如く、よく衆を容るゝこと海の如くであつた。

鳥はなけども泪出でず、日蓮は泣かねどもなだひまなし。

と、一語眞によく聖人の性格を現はして居る、此一語だけでも聖人を主角ある、勇氣元氣に富みたる人とのみ思ふは、大なる見當違ひである、上人は實に圓く大きく、無限の慈悲心の塊であつたと見ねばならぬ、聖人を目して、豪傑僧日蓮などゝ世間が稱揚する間は、

人は矢張り釋尊の如く、圓く大きくあつたので、其元氣の強かつたこと、奮闘的であつたことのみを尊重して、多角的生涯を送られた勇僧と見るのは、蓋し聖人の本領を解釋することに於て、遠くして遠いものであらう、之れに就て孔子が適切な言を謂つて居る、仁者必有勇、勇者不必仁と、之れである、日蓮聖人の勇は所謂仁者必有の仁であつて、勿論仁慈が其底を成して居る、彼の聖人の勇氣元氣のみを見て珍重する輩は、根幹を措て枝葉を取るもの、若しそののみを理想として學ぶならば、喧嘩好きになつてしまつて碌なこととはあるまい、蓋し形式の上のみを見て直ちに其本を論ずると云ふことが、現代の通弊で最も忌ばしきことである、日蓮聖人に對する觀察も亦多く此弊に陥り、其奮闘的の光明は世人皆之れを知れども、其根本的の圓滿なる仁慈の點を眞に解する者は善い、聖人の奮闘的なる所以は實に所謂仁者必有勇で、其根本的精神は、無限の大慈悲より出でたるものなることを知らねばならぬ。

尙未だ聖人が眞に世間に解釋されてゐない證據である若し單に一家傑として、角ある勇僧として研究の歩を進むるならば、其研究は竟に失望に終る時が來るであらう、聖人の本領を知らんと欲する者、徒らに流の末を逐うことを休めて、眞に其本源を追究すべきである。

日蓮聖人の博愛主義と云ふも、實に此圓く大なる人格を成せる、その無限の大慈悲より湧き出で、來るものである、が實際表面より聖人の一生を解釋して見ると、一見博愛主義には縁遠いやうに思はれる點が多い、親鸞法然と聞くと、何となく慈悲博愛の人格が想見され、日蓮と聞けば直に勇氣に充ち、した、奮闘的な人格が思はれるやうな氣持ちがする、之れを歴史上の事實に見るも、彼の良觀が恰も今日の基督教徒が實行して居るやうな、慈善事業を嫌んにやつてゐるに反し、聖人は之れに賛同せざるのみか、寧ろ嚴しく排斥して居る、此等の事實は、聖人が或は全く慈善博愛でふことを重んぜざりしかを疑はしめる程である、が此處は一層深く考へて見なければならぬ、元來所謂慈善なる

ものが、如何に其効果を收め得べきものか、若し夫れ宗教が、一に慈善博愛の主義を唱導して他を顧みないならば、それは全く宗教としての本領を減却するに至るであらう、慈善博愛だけが決して宗教の生命でないことは言ふまでもあるまい。

博愛慈善てふことが、西洋の宗教に於ては盛んに採り入れられてあるが、其茲に至る所以を考へて見ると元來西洋の道徳は、正義と云ふ觀念の上に築かれて居るもので、東洋の道徳とは少しく異なる點がある、即ち後の道徳は、希臘哲學以來、人と人との關係に成り立ち、互に迷惑を懸けぬと云ふことが、その表面の主義となつて居る、此は全く彼の社會組織上より此に至れるもので、人間社會の繁昌を圖るには、或は非常に善いことであるかも知れぬが、あまり四角四面で、終始角突き合ひを生じて、實際生活上大なる欠陥を來すことがあらう、その欠陥を補つたのが即ち基督教の博愛主義である、即ち道徳の方では、人に對して不正を爲すべからず、又人の我に對する不正も許すべからず

ある、現代無暗にやさしくと云ふやりかたは、正に此傾きがあると思はれる、小學校教育の如きも然りて、カラスガアカア。スマメガチウチウなんて如何に兒童にやさしくするといつたからとて、あまり人を馬鹿にしたやうなことを教へて居る、無暗に博愛慈善を施すと云ふことは、又或る意味に於て人を侮辱することである、即ち人の實力を無視して、貴様には出來まいからと、他から見限を付けるものである、人間は少しく酷く當る方が宜い、人を酷くすると云ふことは、或る意味からすれば、人を尊敬する所以である、但し酷くすると云ふにも二つの意義がある、憎惡の念を本として人を酷くすると、同情の念を根柢として、其形を酷くするのである、前者は勿論取るべきではないが、後者は所謂理想的博愛主義である。

今日の日本人が、苦しいと云ひながら其割合に働かないのは、一は慈善事業が根本的に築かれて居ないからであらう、即ち人を侮辱したやう方が多くて、尊敬する方面が欠けてゐるからであらう、トルストイ

と教へ、基督教に於ては、人若し我を打たば、打つまゝに打たして置け、人の罪は之れを許せと教へた、實際社會の事は之れで宜い加減になるものである、慈善事業にしても、この極めてやさしい教と、其裏面に四角四面の道徳とがあつて、恰度よく行はれるのである、西洋では孤兒院に子供を收容する時に、孤兒缺員ありと云ふ札を出して置くと、育児を顧みたい親はソツと人の知らないうちに、院前に其兒を棄てて行くと云ふやうな組織があるさうだが、之れは親たるもの、慚恥心に同情して然かするので、眞の慈善事業と謂ふべきものであらう、日本などでは逆もこんな眞似は出來ない、それが西洋では一般に正義の觀念が道徳によりて、深く羈理に染み込んでゐるから、恣事も程よく行はれて行くのである、若し單に慈悲博愛と云ふことのみで、一方に西洋の道徳のやうな四角四面の制裁がなかつたならば、忌むべき惡結果を來すことがあらう、即ち或る意味より云へば、博愛慈善なるものは、人をして懶惰ならしめ、その進取的活氣を沮害するもので

が曾て斯んなことを言つて居る。

予は人生の大問題に就て深く考ふる所あつて、暫く作物を廢して居た、或る人諫むるに其妻子の糊口を如何にせんと云ふことを以てした、予之を然りとし復た筆を執つた、が更にまた考へた、自分の大問題を決せずして妻子を救ふときは、自分は則ち救はれない、自分を大に救ふことは、同時にまた妻子を救ふ所以ではなからうかと、茲に於て復筆を投じて問題の考究に従うた。

と、其信仰は問ふ所でないが、其心掛は敬服に値するものであると思ふ、慈悲心の由つて來る源は正に此心掛と軌を同するものではなからうか、單に食はず、着せる、養ふと云ふだけが決して博愛慈善の本領ではあるまい、根幹の培養に力めずして、ソレ花が萎む水を遣れ、と騒ぐやうなもので、一寸見て可愛さうだから救ふと云ふやう方は駄目だ、眞に救ふことは出來ない、其の可愛相になる所以の根柢から救はねばならぬ。

一方から言へば斯う云ふことが、謂はれよう、全體人間が貧窮で困ると云ふことは、社會の不均から來るのである、社會の不均は何から來るか、其の最も根本なる理由を求むに、人が互に人間の人間たる所以を覺らすして、所謂我利々々であるからである、若し社會の人間が、根本的に人間の人間たる所以を覺つたならば、不均と云ふことは有り得ない筈である、故に社會を自覺の光明程に導くことは、人類を根柢から救ふ所以であらねばならぬ、日蓮聖人は實に此の大見識からして、良觀の慈善事業にあまう同情せられなかつたものであらう、が聖人は決して慈善的博愛行爲其ものを指斥せられたのではない、其博愛慈善の小さなもの、流れの末なるものとして咎められたので、更に更に絶大なる博愛主義より割り出されて居ることを知らねばならぬ、聖人が晩年身延の山高く水清き處に在つて化を布かれて居た頃、かの峻峻の坂路を踏んで、毎日思親閣に登り、故郷の空を望んで親を懷はれた事、又自身に迫害を加へた所の道善に對しても、一旦教を

ある、日蓮之れを見るが故に菩提心を起した、と言はれたことなどによつて見ても、聖人の弘法は、全く世の中の人間の、苦に苦を重ねつゝあるのを、心底から氣の毒に思ひ、之れを救済せんとの大慈悲心より發して居るのである、博く愛すると云ふ意義は、斯くてこそ眞の意義を發揮せるものと言ふべきである、キンの目の先に困憊て居るのを見て、之を救ふてやると云ふことは勿論よい事ではあるが、たゞそれだけが博愛の眞意ではない、根柢に大なる博愛主義があるから、時に或はやさしくもし、時に或は博愛主義を達せんとする手段として、陽に錢拳を振り廻はすこともある、或は呉れと云はぬに與ふべき場合もあらうし、或は呉れと絶られても與ふべからざる場合もあらう、其場合場合に應じて其形式は種々なるべきも、根柢は皆博く愛すると云ふ大慈悲心から湧いて出るものである、之れが即ち聖人の博愛主義で、博愛の最も廣大なるものである、聖人の一生を通じて、自ら孤兒院を建てられたと云ふこと其他具體的の慈善事業を創められたと云

受けた師であるとして、非常に其恩を思はれた事、其他斯種の多くの優しい事實を窺ひ見るも、聖人の御心の如何を想見されて、聖人はどうしても非博愛的な非慈善的な人柄であり得ないことが解る、其他御遺文等によりて見ても、到處に聖人の眞情が流露して、思禽獸に及ぶとも云ふべき言を遺されてある、又施すと云ふことの必要なる所以に就ても、随分懇々教へられたる點もあり、上人の決して冷かた人ではなかつたこと否寧ろ渾身慈悲の人であつたことが知られるのである、たゞ其慈悲の現はれて居る形が、或は博愛慈善を無視されたかの如く見ゆる點がある爲めに、單に枝末的の博愛慈善を知つて、其根本的な大なる博愛主義を解しない們には、誤解されることがあるのだ、吾れを指する人即ち北條氏の如きは眞先きに之れを導かう吾れを助くる弟子どもは之を釋尊に送り、吾を生み育て、くれた父母は、死せざる前に必ず救はう、と云ふたことや「世間の人は破れた船に乗つて海に浮べる如く、又酒に酔つて火に入るが如く、危ない眞似をしつ

ム事實は認めないが、吾人は枝末を措いて直に根柢に立ち還り、聖人の根本的大博愛的精神を存して、眞の博愛慈善たる實を擧げんことに努めねばならぬ。

今日の學問のやり方を見るに、場合場合を捉へて騒いでばかり居て、其根本を認識することを忘れる傾きがある、世事を紛々一事此に辨すれば他事従つて彼に生ずると云ふ今日の狀態であるのに、片端から一々解決しようとしたつて、到底不可能である、従つて解しまた従つて生ずれば、竟に際限あるべからず、直ちに其根本問題を解決するに若かずである、博愛にしても、若し當に流の末に馳せて姑息的な、小さく狭き慈善であるならば、愛すれば則ち狎れ、愛せざれば則ち怨むと云ふやうなことになる、忌はしき惡結果を來すことがあらう。

或る學校で寄宿舎の生徒に、毎日不時に打鐘して火事の時避難する練習をやらして居た、或る時眞の小火があつた際に、平生巧みに避難することを練つて居た生徒にも拘らず、狼狽して足腰を挫傷した者數名を出

したと云ふことである、避難すると云ふことは抑も未
 である、事あるに當つて落ち付いて居て狼狽しない
 云ふことが根本である、根本を忘れて枝末を逐ふ者の
 愚は概ね此類であると思ふ、博愛と云ふことも之れと
 同じで、先づ根本的に大慈悲心が無くしてはならぬ、大
 慈悲心を根底としてそれが實際に現はれては、或は仁
 となり、勇となり、時に地蔵の如く、時に閻魔の如く
 なるのでなくては眞の博愛ではない、要するに枝末を
 捉へて根本を語らんとするものは恐くは得られまい、
 先づ根本を解するならば、枝末は自ら得られるのであ
 る、日蓮聖人の博愛主義を窺はんとする者、此見地よ
 りせば或は大過なからむかと信じられる、(元)

佛教の道義

(妙教婦人會に於て)

野口日主
 熊井本光筆記

今日は四恩に就て概説を試みやうと存じます。
 四恩とは既に諸姉も御承知でありましようが、一には

通り三歳の童子でも知つて居ることであるが、百歳の
 翁にして猶之を行ひ得ないのであると申されましたか
 ら、さすがの碩儒も儒と感服したと云ふことですが、
 向に高僧の警語の通りではありませんか、實に我佛道
 に善根功德は數多ありますが、知恩報恩が最も肝要な
 のであります、野衲の書生時代に時折驟雨などに途中
 で遭ひまして知人の家に傘を借りたことがよくあります
 が、翌日直ぐ返却するやうな心掛けのものは必ず出世
 をした、然るを其借りた時の難有味を家に歸ると同時
 に忘れて傘の返済を怠るやうなものは、立身の覺束な
 かつたものでありまして、誠に此禮は實行し難いもの
 である代りに、行ひさへすれば多大の功德を受け得ら
 るゝものであります。

さて第一の三寶の恩とは佛法僧の御恩で、當法華宗
 にては常住の三寶と申し、吾人衆生が斷迷開悟して佛
 果を成就するは偏へに之れに憑らなければならぬ、衆
 生は迷つて居るから知らないが、平常隱に陽に冥護を
 垂れ給ふ御恩のみにても鴻大なるものであります、此

三寶の恩、二には國王の恩、三には父母の恩、四には
 衆生の恩であります、此事は佛教に於ては種々の
 經教に説き示されてありませんが、中にも心地觀經には
 最も詳しく出て居りますので、普通の場合四恩に就て
 は多く該經に憑るので、吾宗祖日蓮大聖人も亦諸御
 書中、就中四恩抄と申す御書に「佛法を習ふ身には必
 ず四恩を報すべきに候歟」等とて、人としては必ず四
 恩を報することを努むべき義を懇切に慈教遊ばしまし
 た。併したゞ斯く云へば、其位のことば誰でも知つて
 居る、今更云ふ程の事でもあるまいと考へる人もあら
 う、尤も知ることは誰も知つて居らうけれども、之を
 實行し得るものは甚だ稀有なのであります、古來「言
 之易行之難」とは蓋し此意であります、往昔或る碩儒
 がさる高僧の所へ参りまして佛教の要義を尋ねました
 時、高僧は知恩報恩衆善奉行諸惡莫作と云ふことが要
 義だと答へました、所が學者はこれを聞て、其位のこと
 ば佛教を須たなくつとも誰でも知つて居るではない
 かと反問しますと、高僧は微笑を湛えて、勿論貴説の

れを宗祖は四恩抄に「四大海の水を硯の水とし、一切
 草木を燒て墨となして、一切のけだもの、毛を筆とし
 十方世界の大地を紙と定て注し置くと、争か佛の恩
 を報し奉るべき」等と仰せられて、其高僧の到底書き
 盡し能はぬとを論されました、されば吾人は如何にか
 して設に其萬分の一なりとも酬ひ奉るべく、苦心し努
 方しなければなりません。
 次に國王の恩、これは我日本では天皇陛下の御恩
 であります、天皇の御恩は當に今上陛下に於てのみな
 らず、吾々が遠き祖先より代々天皇の鴻恩に浴して居
 るので、殊に諸姉と吾人とが俱に麗日和風の薫々たる
 が如き安泰なる現代に人の道を歩み得、剩さへ如此一
 堂に會して佛陀の大慈大悲を感謝し、法華一乘の妙義
 を稱へ奉ることを得るは是れ自一至十天皇の御恩であり
 ます、故に宗祖は「天の三光に身を温め地の五穀に神
 を養ふこと、皆是國王の恩也、其上今度法華經を信じ
 今度生死を離るべき國王に値ひ奉れり」云々と讃歌さ
 れました、人によりましては自分は獨立して生活して

居るもので、決して他人の厄介などにはなつて居ないと思つてゐるものもあるが、其は甚だしき謬想であつて上に叙明の君主ましまして國民を撫育されるから、その人は此昇平に歎呼し得るのであります。

其次ぎには父母の恩でありますが、これに就ては我國民は皆小學の一年から耳の痛くなる程教へられては居るが、行ふとは別して至難である、孝經にも「身體髮膚受之父母」とあるが如く、父母有つて始めて我此身もあるのです、されば日蓮聖人は殊に其厚大なる所以を訓示されて「胎内九ヶ月の間の苦み腹は鼓をはれるが如く、頸は鍼の如し、生れて三ヶ年の間慈懸に養ふ程に、母の乳を飲むこと一百八十斛三升五合也」と計上し、更らに之れを米にて一萬一千八百五十斛五升と見積られました、如何にも其苦であらう米から乳に成るのは極めて僅かでありますから、其外詳しく色々と説かれましたが今日は略して置きますが、今の世では乳を止めれば直ぐ幼稚園小學校と云ふ順に、其世話たるや並み太抵のこではない、如此高大なる御恩を受

けて居る衣一枚でも自分では製れないではないか、皆他人の手に依つて出来るのである、無論其代り金は拂ふが、併し如何程金を出しても若し作る人が無いならば、何程欲しくとも着られない、又かく衣服に仕立上るまでは、絹ならば先づ養蠶家の手によりて繭となり、其から人手をかりて絲となり、又染物屋の厄介となりまた仕立屋へも廻る、其間には牛馬が桑を運搬して呉れることもありましよう、如斯考へて見れば此衣物一枚でも何百人の手を煩はしたか知れませんが、されば獨立だなどとはかりそめにも云へません、金を以て買つたとは云ふものゝ人が賣つてくれなければ今日から困るのであります、斯様に世は相互に世話になり合つて居るのです、故に此邊の道理を深く心意に辨へて、畜生にも恩があると想はひ、其處に同情が湧いて憐み勞はり虐待などは思ひも寄らぬとなりませす、我宗祖には之に就て畏い美談がある。

諸姉が既に御承知の如く、宗祖は一度口を開いては八宗九宗を散々に折伏し、頭の座にもひるみ給はぬ程

けまして、世には父母に孝養し參らする人は幾人あるであらうか、宗祖も「死し給ひてより後初七日二七日より乃至第三年まで人目の事なれば形の如く問ひ候へども、其より十三年四十余日の間はかきた之間ふ人はなし」とて、三回忌位までは世間の義理にても法要を營むが、其後は怠り勝ちであると申されました、あゝ實に辛い處まで手の届いた御警訓でありませんか、世に在せば養ひ奉り進ませば追善し奉るが佛道であつて、子たるものゝ命を致して鬪まねばならぬ道でありませす。

終に衆生の恩、此は佛教獨特の教であつて、他の宗教には人には親切に爲よと位のことはありませんが、特に大切なる恩の綱目中に數へ挙げたものはありません、衆生と云へば人類は勿論、凡そ生きたし生ける牛馬畜類までをも數へ込むので、誰人でも直接間接に皆一切衆生の恩を蒙り居ます、慙く申せば復己れば獨立して居ると云ふものもあらうが、それは矢張思考の及ばぬから起る誤解であります、抑も私共が只今着

意志の強い方でありましたが、其半面にはまた極めて優しい情の溢れてましました方で、御自分の乗馬をこよなお勞はり遊ばしたことがありません、聖人が晩年御所勞にて常陸の湯に行かると、時、身延から池上まで馬に召し、其處にて馬を、蓮原殿に預けんとて「かづさの蓮原殿のもとにあづけをきたてまつるべく候に、しらかぬとねりをつけて候てはをほつたかなくおぼえ候、まかりかへり候はんまで此とねりをつけをさ候はんことをんじ候」とて其馬の馴れぬ舍人に代えることまで心配して、馬をお勞はり遊ばしました、何とやさしいお情けではありませんか、此み心を以て人に臨まるゝから一切衆生の苦も日蓮一人の苦の如く思召す程大慈悲が溢れたのであります、世人も亦この心掛けを以て他に對すれば尚に深切となり、親には孝、友には信、兄弟に佛なる温き人格を修養し得るとは必然でありませす、尙此外澤山の逸話があります、今日は省略します、が予が今一つ感して居るのは、彼の徳川の幕政を革新して細民を救ふ爲め兵を擧げた大英雄大鹽平八郎の逸話

であります、彼は佛道にも造詣深く極めて心のやさしい人でありました、或る冬急用で遠方に立出せんとした、折柄凍雲空を麗し朔風寒く、飛雪積々として降りしきつて居る、ふと門側を見ると唯一輪の椿の花が美しく咲いて居るが、隣れにも吹雪の爲めに惱まされて居る風情、平八郎は見るに見兼ねて旅立ちの忙しさも厭はず、直ちに糸を持ち出して吹雪を防いでやつたさうです、何と美しい心ではありませんか、さればこそ衆民の爲めに彼れ丈けの計畫が出来たのであります、

よう、諸姉！世の中には随分牛馬大猫をも勞はる人も善くはありませんが、併し佛敎では根本から之を憐れざるべからざる理から説き教えたのであります、佛敎の特長は實にこゝに存して居ると云はねばなりません、以上を四恩と云ふのですが、前にも述べた如くたい知つたのみでは知らざるにも若かない、恩を知れば必ず之れに報ゆることを勉めねばなりません、然し如何にして之れに報ゆるかと云ふ段になると、其時と場合とで種々方法もありますが、第一吾々佛徒としては朝夕誠

意を以て題目を唱へ奉れば自然と報恩の義に契ふので廻向文は即ち四恩を報ずる言上になつて居る、故に諸姉は現に實踐躬行して居らるゝのであるが、尙此義を會得して子女を教へ一層身を以て導びさ給は、其感化と御利益との結果善き人に育て上げることにも出来る、又此意を心得て修行するときは忍んで水天宮に参り、人よりは自分のみの利益を祈るやうな邪僻もなくなる一體斯様な願ひは神が邪神なればいざ知らず、眞の神であれば聽かれやう苦がない、他人は悪しかれ自分は善かれなど、は以ての外である、若し其をかなへるやうな偏頗なものは神でも何でもない、苟しくも人として矢張先づ四恩を報い、而して後自分の冥福を祈ると云ふ願でなくてはなりません、世の中は本來が共同的社會的生活であつて決して自己獨りのものではない、故に此敎こそ眞實の敎であります。

願くば諸姉！佛祖宗祖の本意に隨順し、日々の心掛けを怠らぬやう努力せられんことを、俱に共に御本尊に誓ひましよう。

報道

●第一部監督布敎巡回日記

本宗布敎部の發展に連れて宗門は全國に監督布敎師三名を置くの劃を設けぬ

姫路妙立寺住職にして京都總本山妙滿寺部長たる野老僧正は稱れて第一部の擔任せらるゝ事となり、十月二日多敷の見送りを受けて京都を出發し翌三日東京宗務院に入り、四日午後六時上野を發し五日青森に着し、一泊し六日梅ヶ香丸に投じて津輕海峡を無事北海道函館に着し直ちに瀧車にて荒野法々翌七日午前七時江別に着すれば荒川、岡澤師を始め村長名越小佐野田郷長外多数の出迎を受けて無事布敎所に入りぬ、其日午後一時より野嶋村岩田氏宅に一座の法話を修し其夜法話を齎す

に家産法話を齎し野老僧正の訓話あり翌十日午前八時多敷の信徒に送られ江別を發し荒川部の案内にて札幌に歸り信徒久保忠太氏宅に一座の法話を修し各所の觀察を修へて即日小樽市に來り信徒野島氏宅に一座の法話を修し中央小樽より成り惜しくも清仰の信徒を後に瀧車は函館へと走りぬ

夜瀧車程趣味なきものばあらじ、されど既得のまよに思ひを彼方此方に走せて僅かの北海道道中亦多少の感なき能はず、熊が棲むく人の心も亦よき處也、荒川師は二十五年前北海道開拓に渡せし人にして歸依の信徒中々に多く先年焼失せし法華寺の再建も近きにあるべし、瀧車の函館に着しは十一日午前九時なり直ちに比羅夫丸に投じて海上波靜かに青森に着し八月朝に到れば中田量叔師及信徒の歡迎を受けて夜十時本齋寺に入る十二日午後一時本齋寺に演説會を開く

日蓮主義の一瞥

野老監督布敎師

根本教義

野老監督布敎師

盛岡は信仰の地なりされど此地大書を蒙りて總案爲めに影なりしも熱心に拜聴せしり十五日午前七時多敷の見送りを受けて出羽に向つて出發す途中半日の休息を佛館に頼みて松島驛に下車し車を雇つて海岸に出で船を雇ふて松島の勝景を探る、さらでたに日本三景の今宵は九月十三夜の月影水に映して其狀筆紙に盡し難し、かくて鹽釜港に船を捨て、鹽釜に出で陸奥ホテルに一泊し翌朝福島に出で奥羽線に乗換へ赤松橋を徒歩し平賀町にして其日午後二時赤松驛に下車し平賀、鈴木兩師を始め多数信徒が題目の誦高く出迎ふ二里にして山梨縣本覺寺に入り午後四時より一座の法話を開く

監督布敎巡回の總意

野老監督布敎師

宗教と道徳

野老監督布敎師

其夜來庭者の懇望を容れて再び

日蓮聖人の忠孝觀

野老監督布敎師

人生究極の目的

野老監督布敎師

百余の總案常に會ひ難き法雨に浴せるに大歡喜を表し信徒等が羽織袴の待遇に誠は朴實の美風と云ふべし、翌十七日早天赤湯を出發し其日福島縣二本松に出で米澤本師外信徒等が願本法華寺監督布敎師歡迎事務所を設くなど其浦仰の度も知れたり其夜は大宗院に法話を齎す翌十八日午後一時より蓮華寺に野老僧正導師として宗祖御會式を修し大演説會を齎す總案百五十

人は如何に信仰を要するや

川崎 隨行員

野老監督布敎師

八日江別布敎所に於て演説會を開く

川崎 隨行員

信仰の要義

野老監督布敎師

人生觀(二席)

野老監督布敎師

にして百餘の總案多大の法悦に住し其夜同町岩田氏宅に一泊し懇切の待遇を受け翌九日再び布敎所に演説會を開く岡澤師の訓會の辭に續て

身心の營養

川崎 隨行員

野老監督布敎師

本論

野老監督布敎師

満堂の總案齎へるが如く其夜又も岩田氏宅

我宗の特長

野老監督布敎師

二百の總案熱心に拜聴せり、當寺は二十年前全部焼失したりしが庫裡は前住之を再建し現住職中田師四五年來本堂再建を企て近時漸く完成を告げ近々管長親下等を描して盛なる人佛式を齎す由、十三日午前九時八月を出發し其日午後二時亞岡市に着渡邊元敎師等の出迎を受け其夜法華寺に演説會を開く

川崎 隨行員

野老監督布敎師

佛性論

野老監督布敎師

十四日午後一時再びこゝに演説會を齎す

川崎 隨行員

野老監督布敎師

心帯大小

川崎 隨行員

野老監督布教師
其夜雨を冒して同町本久寺に到り同じく御會式並に演說會に望む

統一の本尊

川崎 隨行員
野老監督布教師

滿堂の大家法悦に住し十時宿にかへり翌十九日其昔鬼が棲みして不安途を後に野山に出で岩越縁に乗換へ岩代會津に入り多数の出迎を受けて指定の旅館伊勢屋に入り翌二十日早天行内無著師市會議員にして佛法寺惣代たる佐藤三郎氏等の案内にて羽黒山に登る羽黒山は我州重日什大正師得度ゆゑにして而も晩年支妙能化としてこゝに多数の學徒教養中宗義の面目如鏡の兩抄を拜讀して多年の疑問を解決して萬難を排して宗旨再興の大業を遂げ給ひし宗門に因縁深き地なり山高き今に東光寺の跡もなく羽黒大神の社あり、山を下れば奥山の温泉あり深流木清く瀧山の紅葉真に趣景向遊に草鞋の紐を解きて入浴す、それより十餘町にして有名なる白虎隊の古跡を形ふ、紅顔の美少年が國主の爲めに自刃せして花の如き髪はしき昔を憶ひつゝ遊澤の於國なる竹組の老體廟に詣て大

竹内 無著
川崎 隨行員

其日妙法寺に演說會を開く
開會の辭
身證論

たる此地いつの日か彼等のすべてが大慈父世尊の御手に救はるゝを自覺する時やあると思へばうたゝ感慨にたへざるものあり漸にして本或寺に着一座修法の夜宿泊所に宛てられたる信徒森氏宅に到る此家は代々管長殿下の御進教に必ず御宿申上げ來りしとて女主人は實に一村のほまれと喜びて話されしも當寺檀家僅に十六寺院又極めて候少面々其間悉く檀門念佛の輩のみ數百年來其潮寒冷厲の中に持ち來りし信仰の操は白山より氣高く法華安心の徹底釜屋の海よりも深し今尙子女の他家に嫁するを難禁し若し同行中に於て其縁なき時は速く北海道の縁家に送りて宗門の家に嫁せしむを例とすあゝ奪い置不情身命の行者日經上人の化驗三百年後今日尙此の清烈なる信仰を傳ふ我等はかゝる感にうたれつゝ午後信仰を傳ふ我等はかゝる感にうたれつゝ午後島嶼「報恩」を次に能仁僧正は「靈活なる信仰」なる題下に一時三十分問題ととして顯本教義の象徴なるを教示され聽衆一同歡喜の心もて熱心に聞法せるを見る同夜引續き演說會を開く聽衆畫に増して盛に約百名を數ふ予は「本尊信仰の重要義」を能仁僧正は「本佛の御心」を二時間に移りての廣長舌を振はれ法益甚だ多し翌三日午前七時修説に際し信徒の懇望に依り一席の法話を發しそれより多數信徒の見送を受けて小松停車場に向ひ行程一里半直ちに乘車十一時金津驛に着寺僧及信徒の出迎へを受けて妙法寺に入る後二時より説教會予前席の役上人は「我々の安心」を説教せる夜分は演說會寺主の開會の辭予は「佛敎の根本義」

我宗の信仰

野老監督布教師

にして軍部派の僧侶二名も來聽せり妙法寺は目下本堂再建中なり其夜再び伊勢屋に泊り翌二十一日杉木經片岡本村寺に向ふ、一行益々健全、諸て諸天の謝加護 (隨行員川崎時照)

第三部監督布教師演說

能仁監督布教師は山名隨行員と共に其任務を果すべく關山を發し八月二十九日關山經會敷町順正女學校に於て關山の修養講談會に於て午後八時開會日蓮上人を透して歸つて法華經の題下に山名隨行員之を説き野仁僧正は修養上に於ける四大要義の諸題にて懇切なる指教を垂れ三十日土居本尊寺に開會山名隨行員の唯有一乘法の説ありて後野仁僧正は信仰の調整に就て演へる三十一日鳥取市に向ふ道程山路二十三里九月一日法興寺に到り午後二時山名隨行員は人生の大目前に就て野仁僧正は佛院降世の真意義を講説せり亦八時より宗教研究の主要問題及日蓮上人の統一主義に際し廣長舌を振へり四日松崎本立寺に於て窪田純受師の大日蓮論山名隨行員の信仰意識の調整に就て説教せられたる後能仁僧正の信仰と本尊の關係を論示し多大の感動を興へたり同寺は本宗真信の大権都市橋邊龜氏の菩提寺にして同法は一統と共に講談に列して熱心聞法の功徳を積む信仰対象の大木は在來の習風より起へて純善一貫の妙境に入られたるは悦ぶべきことどもにして四日市橋家を訪ふて懇待を得たるは感謝する所也、先に出陣方面を巡教せられたる監督布教師能仁事一僧正の一行は去る九月廿八日關山なる自房出發重

を僧正は「本佛の實在」を各々熱心に演了せり同寺は金津町に僅か六戸の且家を有するのみ加ふるに夜來の雨降なりしにも關わらず多數の聽衆を得たるは吾人のうれしく感する所也殊に同寺住職が熱心に寺門の經營に努力し實行の上にも不言の教法を教へ信託又信仰に活氣を有するは其間地に日經上人を教けると近代には日經上人の化驗地たるに於て深き因縁なるを覺り翌四日午前十時同地を發して福井市に向ふ福井驛には内藤日郎師三僧侶と共に山出へられ盡岡布教を同地より約三里なる關江町に開會する旨報告せられたるに依り直ちに同列車に乗り續き大士呂驛を過ぎ關江驛に着同地日宗各教區信徒に依て組織せられたる信野會諸氏の出迎へを受け日宗布教所に入る午後二時演說會開會内藤僧都は「語る勿れ信教自由の意義」を演了られ予は「信解如來誠諦此語」の聖語の下に本佛三輪の妙化を説いて統一の信仰を教へ僧正は「宗教意識と信仰の調整」なる題下に於て對答衆に向つて詳々として實在觀念と道徳との關係を鮮明に演説せられ滿堂の聽衆始めて統一の教義と活力ある信仰の鼓吹指導を受けて甚だの喜びをなせるは如何に宗門信徒の上に正しき信仰を欲求しつゝあるかを實感し我等は實にや宗門の爲め越前教界の爲に中心法悦に堪へざるもの也

午後五時演了明日の演說を約して直に關江驛に車を馳せ五時廿分の下り列車に搭じて福井妙法寺に向ふ午後七時開會「開會の辭」内藤日郎師予は「國民生活と日蓮主義」を上人は「道

立ちたる信徒に見送られ午前七時發北陸運載の途に登る同夜京都本山に於て化導成辨の新編會を修し翌日午前七時發同夜五時金津市に着同地僧侶信徒の出迎を受け宿會に當られたる六斗林本尊寺には着きぬ翌三十日同寺に公開演說會開會同地一茶園市内廣告等行届きたる事として定刻に先立ち聽衆堂に滿つ中にも他宗僧侶多數來聽せるは同地に於て珍らしき現象也演題は能仁監督の「報恩」に次で僧正は「宗教意識と信仰の調整」なる題下に約十數千言を以て關山なる同地教界に一大革命の光明を興へられたるは予等の歡喜に堪へざる所也引續き十月一日には金澤純信の檀徒の爲に演說會を修せられ學師を前席として上人は「法華信仰の意義」を約二時間懇々と説き示され法益甚大なり尙同日金澤本宗各寺院に於て修法後監督調査せられたる翌二日午前八時金澤各寺僧侶信徒數十名の信仰のまなざしに送られつゝ成島布教師及隨行員にしての手を隨へ茶屋本成島に向ふ美川停車場に至れば寺主山田誠心師總代竹内助郎等と共に出迎へらる停車場より寺院所在地迄一里一行停を馳せて進めば雪を戴ける白山はいつも乍ら美しくも煥然として天の一角に輝ゆる華委は以て旅情を慰するに餘りあり加ふるに眼を右に運せば日本海の怒濤岸に當つて玉と砕くる壯麗を其名もやさし小舞子の白砂青松の間に散すを得るをや我等はかゝる天然の美に打たれつゝ行けば濃邊の老若男女天のどいて手を合せて拜するもあり念佛申して仰ぎ見るさへ得せぬもありあり加賀門徒が中堅

徳の權威」を例の如く二時間餘の廣長舌聽衆堂内に溢る翌五日早朝寺主及信徒と共に福井城北一里の地にある彼の建武中興の勳臣藤田公職役の舊跡たる聲明寺曠に行き直に車を歸へして別格官階藤田神社に詣て有名なる公が宛を手にするを得たり概宛の表正面には壽量品の斯文如來秘密神通之力の全文を刻し其他左右には天照八幡等祖宗の神名を表しせりや公の大忠は實に此の根柢ある日蓮主義信仰の上に築かれたる也且日蓮主義と大義名分論とは面二不二の關係ある事六百年の昔より定まりて眞平經國の士は必ず王法佛法冥合の大理想を自覺せざるべからざるに數百年來封建の藩制に迫せられ發展せざりしもの漸く今日に至りて黨者の間に唱導せらるゝに至れる事恰も公の宛五百年の長年月聲明寺曠の地下深く埋もれしもの明治憲法日蓮主義復興の時當つて發見倉庫せらるゝ事偶然か必然かとも角も多大の感興の起るを禁する能はざる也予等はかゝる思ひに於ける内藤は我等をして昨の如く關江布教所に往くべく福井停車場に着す即ち十時の列車に乗じて同地に向ふ乘車は昨に越ゆるの大盛況也

内藤師は「世に宗教の必要なる所以」を予は「國策の中心の總義」なる題下に辨じ僧正は「日蓮上人の統一主義」を尤も明確に各方面より論斷せられ會員中正義の布教を喜びの餘り泣いて聽法せるも多數を見受けたり演了後陛下と日蓮主義の萬歳を三唱し芽出度二日間の關江演說を終り直ちに列車に搭じて福井市に飯へり夜食さへそゝに早々熱心なる聽

衆が拍手に迎へられた。先づ内務師登壇次に予は「浄土」を僧正は「聖日蓮を生める法華經」を無量事辨了如何萬歳を三唱し身出度開會したり翌日早朝同市善慶寺本經寺及本宗布教所を監督巡視し其より車を走せて山内本行寺に向ふ行程三里道路曲回車上煩雑を氣遣ひつゝも午後一時無事着山主鈴木顯真師信徒團體の御禮へを受けて本行寺に入る直ちに演說開會「開會の辭」鈴木師予は「所謂の浄土」を上人は「法華經主義の實現」なる題下に二時間餘を演説せられ夜食後觀劇山主の披露に次ぎ予は「統一の本尊」を僧正は「佛子の自覺」なる意義懇切に説教せられ二百の聽衆驚喜滿仰して聞法せるはいとうれしかりき

明くれば七日早朝本行寺の大檀那渡邊爲依氏方に向向し朝食後僧正は奥駕に鈴木師予等は徒歩三里の山道なたりて雨居勢正寺に着す葦食後満堂の聽衆が唱題に迎へられて登高峯鈴木師予は「一念之信を予は「本場の調整」を後に僧正は「須らく法華經の心を信ぜよ」との題下に淳々として慈母の愛子を訓ゆるが如くに教示されたれば感に堪へて會下に泣き伏せる者さへあり殊に福弁山内福江等三里の地より先日來の化を基ふて來り聞くも多し我等は云ひしらぬ感に打たれつゝ夜の演說壇に上る前田寺主の「開會之辭」予は「我國將來の宗教と日蓮主義」を上人は「信仰の調整と統一の本尊」を演説せられ聽衆盡に告し約三百を數ふ翌八日午前夜來の大雷雨を冒し草鞋竹杖の出立にて雨居を發す露に包まれたる越路の連山濁流石をも流す一帶の大河冷たく重き山氣

身に懸するを覺へつゝ一里半を越江縣隊所在地迄從事其より車を馳せ歸江町に着同地信解會幹事藤氏の出迎へを受け本宗熱心の信徒堀江幸作氏宅に立寄り修法後畫餐の供養を恣にし其より高木信行寺に向ふ同寺は目下無加ふるに貧窮の寺院なるにも聞はらず小檀の人々申合せつゝ雨中西に馳走して準備されたる事なれば多数の聽衆堂に滿ちぬ鈴木師予は前講せられた次で僧正は「示教信仰の高潔」なる題下に熱心に説き示されぬ其より宿泊所なる同寺に於て代萩原仙右衛門方に休憩同夜の演說會には「日蓮主義の體用兩論」を予は辨じ僧正法華經の信心」を二時間餘熱烈に辨了せられ聽衆は盡に信し遠く歸江町より日宗信解會員の墓ひ來るもの多し其他近郷近在より雨を冒かして集まる者百廿名餘法益無盡なるを覺ゆ同夜一泊翌朝發十一時今庄に着善勝寺住職暨智了師總代萩原仙右衛門等の出迎を受け同地唯一の旅館大黒屋に到る午後二時演說開會「開會の辭」聖賢了師次に予は「日蓮は日本國の魂也」を論じ僧正は釋迦教徒の信條」なる現下に北陸地方最後の布教の地として上人が先聲辨才を遺憾なく發揮せられ演了せられたるは午後十一時地きされば聽衆者熱心に耳を傾け中にも郡領村長京藤長右衛門氏を始め今庄群員及師範員など尤も至誠合掌の態度は我等をして一層熱誠の度を高めしめたり翌く我は十日午前九時三十分寺主及鈴木師予並に京藤長左衛門氏等の見送を受け歸本山に向ひ午後五時京都着鈴木師予外數名の出迎を受けて本山に着しぬ (隨行員紀野後編)

◎大阪天晴會
 第四例會 九月十七日夜大阪ホテルに開會、會衆十五名、例に依り左の講話あり
 上人の人格(意思の方面)に就て
 堀本 日種氏
 (新會員) 嶋村 日正氏

上人の前身
 次で友廣善夫君に故コッホ博士の靈魂滅亡論を紹介し科學者の迷想を憐む所あり、夫れに就て二三批評あり、終て幹事池田爲三郎君に大會に對する報告を爲し、會計報告表を一同に頒ち、又大會後會員決着の結果幹事二名増運の事を協議し、即決の上大阪商船の支那人山岡順太郎、神戸貿易商の清水英吉の兩者を幹事に選定したり

第五例會 十月八日兩夜大阪ホテルに開會、會衆十二名左の講話あり
 上人の主義(合理的範圍)
 堀本 日種氏
 科學安宿と宗教の信念
 清水 英吉氏
 上人の節操
 友廣 善夫君氏
 萬國八幡宮に對する上人の態度
 池田爲三郎氏

講話後會員中千里眼に就て批評する所あり、又會員八代祐太郎君は商業觀察の爲め十月中旬印度出張を機として佛師等連覽すと云ふ、依て本會は特に印度へ情に就て探査方を懇囑したり

◎十月の東京教會
 ○第一義會 十月二日午後一時半より開會例に依り嚴肅なる修法を爲し左の講話あり聽衆滿堂
 先づ信ぜよ
 井村 日藏師

日蓮上人の弟子檀那に就て 本多 大僧正
 △日蓮主義青年會 九日開會會員の多数に各學校に在る者なれば研讀其度を加へて上人の天主教大信仰の真義に逆み眞體を把握するに近きに到れるものあるを見るにいかに向會の例會演説が多大の感化と研究方法を示しつゝあるかを窺ふに足るべく聽衆は終始敬虔眞摯の態度を以て傾聽しつゝあり講話は左の如し

信仰を求むるの道 關田 養叔師
 菩提心に就て 本多 大僧正
 講演後茶話會を催ふして各自研讀の経過又は方面等を告白し何れも本多講師の指教を請ふに満足を得午後四時散會したり

◎妙教婦人會 十六日午後一時例會を開き本多大僧正の導師にて修法を爲し左の講話あり
 信仰の要義 石川 顯隆師
 陽教女性觀(其二) 本多 大僧正
 本多大僧正の女性觀に各方面より女性の徳と力を説き來りて過去及現代世人の女性觀は其本質活動を諒せざる價値なき觀察にして採るに足らざるを論じ本来の女性に於て男子の後ろにのみ行動すべきにあらず陽教の本旨より觀れば向上大覺の勝性を具ふるが故乎乎たる宗教信仰の生活に入らば其光りを發揮して總ての方面に於て意味ある活動を爲し男子と共に無上の光榮に接するを得べきものにして而かも是れ即佛り法華經の持長にして眞體なりと平易懇切なる講話には滿堂の女性何れも大満足の體にてあり終りに茶菓を供し散會したるは午後四時三十分なりき

○講妙會の聖語録講演 講妙會の法華經講義は十月十八日土曜講演にて全部を講了せり今回更に本多大僧正編纂に係る聖語録を講演すること決し十一月五日開講每土曜日午後一時より讀經講演せらるる由

○棲香會講演 同會は十月二十三日秋季大講演會を神田和強學堂に開けり小林一耶氏の日蓮聖人の博愛主義に就ての講演ありて境野黄洋氏の雨無妙法蓮華經と云へる題下に日蓮主義の活現的眞理實行の特長を紹介し本多大僧正は日蓮上人の理想なる講題の下に熱烈なる廣長舌を振ふて三百の聽衆を殊に多大の感動を與へ日蓮主義の卓越せる所以を感服せしむるものありて午後五時散會を告げたりと云ふ

◎千葉縣救済
 ○千葉縣下第五回聯合大法會 は十月十五日より三日間に亘りて長生宮新治村萬光寺に於て莊重森嚴なる戒壇を設け音樂天童の大儀式によりて舉行せられたり當番教區に在りては月前より準備員擧つて萬般の設備を整えしに遺徳なき諸君を尊へられ十五日開講の衆兩ありしと諸君會堂内に溢れ午後一時當番中村布取師の導師にて二十餘名の僧員は至誠の異日同音によりて飄飄の妙味を揮ひ觀望家品の新念大法宣傳の加被を請ふて甚深の靈感を講評し大法會開會の奉告式を了したり十六日は夜來の雨歇みて一般參拜者の功徳を積むに宜き中日とはなりを以て兼て招待狀を發したる地本山信徒總代長生宮長壽院長町村長吏員學校職員千葉縣各教區代表僧員並に支學林教師學生等逐次參集次第午前九時を

報するや音樂隊を先導として小川朽木の兩脚禮佛及萬光寺檀家總代地方檀信徒の一團は皆長現下歡迎の旗を翻して本館停車場に迎ひ一發の煙火中日に鳴りしとき會長代理として宗務總監野日天主僧正は三上布教師を頭へ威容嚴肅なる正裝にて徐々院車によりて到着せられたり午後一時鐘聲の響きととも各教區代表の僧員四餘名は何れも正裝を調へて清けき態度を示し金轉引の尊禮に次て到禮たる衆を奏し十數名の可愛の天童は紅葉の如き手に美しき蓮華を捧げ皆共代理の大尊師にて本門妙實の法珠を捧げ皆共佛道の法水を取りて佛陀大慈の救済を奉請し一切の所願満足を懇請しいと厳肅に大戒事を終り當日御寶前に於ける管長代理の講讀誦文の意趣は左の如し
 講で奉勸請南無本門壽量之大本尊別面者末法大師師日蓮大聖人等大悲知見顯覽あらせ給ひ

夫大法會者佛日增輝皇道繁榮を主として布教論議同新願書字解説等の一切を聚集修行するもの也然るに大法會の復興日尙淺く準備未だ完からず年を逐ふて完美を期せんとして歎くは佛經開闢あらせ給ひ

抑も此大法は日蓮淨土唯一の大法國壽一の妙法也國に依之榮へ人は依之難かなり此故に宗釋大聖人は末法に降誕して刀杖瓦石の難に遭へて以て濁浮の衆生に之を勸め給ふ法華正義の就中日持上人は海外の布教を企て親夷執福滿韓西亞の野に振ふ日什上人は立正治國を上げて三度び 天皇に奏し日親上人

は治國論を獻して足利將軍を誅む此故に海内靡然として法華に歸す足利の番臣に至りては海内法華の寺院實に八萬と稱す眞に盛なりと謂つべし雖然天文法皇安土宗廟大務供養長法難の災厄に逢ふて自宗絶滅の淵に瀕し僅かに退嬰を主として今日に至る此間我千葉經七里法華は編素心を一にし頼頼を既倒に同さんとして専ら青英に力を盡し時に龍象の起るありと雖も昇平年久しく扶を用ゆるに所なし空しく巻軸に麗れて法蓮の將來を待てり

今や維新の盛時に際り陛下の御授成は遠く八柱に輝き國運廣く五州に遍ちらんとす此時此際一佛一王の大法堂に昔日の如き状態に沈淪するを許すべけんや傍ら内を顧みれば世間唯に文明を誇ると雖其種々なる小見邪見學見誤見の憂るものありて道心を蓋蔽し國家獨立の大本をも危せんとす豈に悚然たらざるべけんや身大法に任ずるもの協方一致奮勵一番せざる可らず

宗祖云へるあり行學の二道廢せば佛法あるべからず傍陀云く如來滅後知佛所說經因緣及次第隨宜如實說

進んでは宗祖上人瀟浮統一の號令に聞きて有ゆる小見邪見等の悉く此妙法に統一せられ法國共に常住の理に現はし常樂我淨の風大千法界に吹き渡るまで身說法華の活信に住して弘經を勵むべきや香風徳香一切遍經云我此土安穩天人常充滿又云香風吹奉華更爾新好者

願くば此功徳を以て

天皇陛下御覽 萬國運昌併而日韓併合同
題志士英靈日清役陣歿者第十七回忌日露役
戰病死英魂第十七回忌并今叫大洪水横死精靈
及七里法華檀信徒之面々先代々祈志精靈
無上天覺仍面風通如作

明治四十二年十月十六日
顯本法華宗普長代理專習慈院日主
瑞首 和南

午後三時より満堂立錫の地なりしも漸く講壇を發けて演說會を開けり

開會之辭
秋葉 純一
三上 布教師
野口 龍正

信後の人
其講題によりて熱心懇切なる指教あり聽衆は
何れも我大法信仰の眞義に接するを得て無上
の感興に入りたるものゝ如し野口龍正は宗務
上の急要事件ありて三上布教師と共に終列車
にて歸京せられたりしも講演は各教區布教師
等の相繼いで熱心なる廣長舌を振はれたるを
以ていかに日蓮主義の大特色を發揮して其靈
光に浴せしめたるが吾人の講で感興を表す
る所にして亦七里法華有縁の信徒は甚だ多幸
なるが念ふ也講題居士は左の如し

- 自己と他人
所感
高石 音次郎
京 藤 義隆
成島 布教師
石井 寛 後
小澤 布教師
木村 乾 中
鈴木 信 海
- 慈悲
日蓮聖人の處世觀
理想界の安心
持戒
現代思想の傾向
理想的宗教

日蓮聖人と愛國
宗教徒の天分
信仰と生活
吾人の眞生命
時本感
法華は諸經の統一
閉會之辭
森川布教師(四教區)
全阪 布教師

新く三日間の大法會は歡喜法悦のうちに終りを告げたり吾等七里法華の教團が精神的大結合の根柢を作り成して日蓮主義發展の歴史に於て陸難たる光彩を放つべく更に一段の奮勵努力を要求するものにして現在の大法會の聖事は少なくも今少しく深き意義と實力とを存在せしめざる可らざるを思ふ

△千葉町講演會 十月十四日午後八時千葉町本願寺に開催

開會の辭
國民師表者たる日蓮上人
三上 布教師
野口 龍正

顯顯的宗教
三上 布教師
野口 龍正

顯衆三百餘名にして居士の熱心なる態度對切なる所論は能く日蓮上人の高き人格に接觸せしめ法華統一の開闢主義は現代文明の缺陷を匡救し調整するの大活作用を有するの理實を知らしめ多大の感動を興へて午後十一時四十分閉會を告げ餘興として蓋音樓宗祖一代記の高燈及生花等ありて頗る感會なりしと云ふ

◎感化事業講習會 内務省開辦感化救濟事業講習會は十一月十五日より二週間開會せらるゝ由なるが東金町西福寺住職山岡龍正は告殊千葉經知事の推選に依り出席せらるゝと云ふ

胃病は果して根治せざるや

天晴堂藥房發行の胃病散は此の問題に對して極めて適切に且つ確實に之に答ふを得べし

何となれば
天晴堂藥房發行の胃病散は左の特色を具備すればなり

第一 胃病散は彼の消化薬として有名に且つ効驗の著大なるチヤスターゼ等を配合せる最も完全なる胃病散の専門劑なり

第二 胃病散は消化と消毒に對して絶對的有効の健胃劑なり

第三 胃病散は形式の虚飾と廣告の誇大とを排斥し飽迄も品質本位を以て立つ最上の理想劑なり

故に
胃弱(消化不良) 瀉飲(慢性胃加答兒) 胃加答兒(食傷)(急性胃加答兒) 瀉(胃痛) 胃痙(胃痛) 胃神經痛 胸痞 食慾不進 腹滿 宿醉 悪心嘔吐 吞酸 曹雜 小兒吐乳等一般の胃病散は患者に對して極めて親切に調劑せられたる胃病散のオーソリナリーなり

胃病散

本劑はチヤスターゼ其他の消化及消毒劑を配合せる完全なる健胃劑なり

胃病散本輔

東京市京橋區木挽町一丁目拾四番地

天晴堂藥房

振替口座五四六番

藥價 二日分 十圓 五日分 廿圓 十日分 四十圓 廿日分 八十圓 卅日分 一百圓

日蓮上人傳記集

宗門古傳中最正確のもの八種を収む研究上の唯一典據標準的史料なり

● 原本十一卷合本一冊五百頁

實價洋裝 一圓四十錢
和裝 一圓三十錢
送料 十 二 錢

録内啓蒙

第壹卷 安國論

祖書註釋書の白眉たる録内啓蒙の編輯にして條目標釋等の施設閱讀の便利を加ふ

▲ 目下 缺員あり入會申込に應ず▼

會報規則書進呈入用者は郵券二錢添へ申込るべし

日蓮宗全書第三次刊行報告

標祖書綱要刪略

正議 會本

● 既刊書豫備殘本あり希望者に頒つ ●
原本九卷 合本五百五十頁 實價洋裝五十錢 和裝一圓四十錢 送料八錢

祖書綱要の出るや五百年來教理發展の潮流は悉く是に朝宗し一家教學の組織燦然として茲に整備大成するを見る眞是萬代の龜鏡學界の指南たり優陀那和尚本書を推稱して宗門曠古の美説といひ在家出家初學者必讀の寶典となす本刊書は原選廣本を以て修補校訂を施し綱要正義二卷を加へて會本となし新に條簡を設け別に新撰類從索引廿余紙を附録とす本索引の編製は系統的分類配列の様式に據れ宗學辭典として應用自在なるべし殊に布教家にあるを以て又一部の宗學辭典として教理に信條に當面の問題に關する根本的解釋を求め的確にして富麗なる智識を得るに於て最も便利なるものあらむ

東京市京橋區疊町 須原屋書店内

日蓮宗全書出版會

振替口座四九六〇番
電話本局三三七五番

顯本法華宗要品 附回向文 完

上製一部 貳拾貳錢
並製一部 拾四錢 郵税不要

右品切の處第八版出來せり純善の信仰生活に入らんとする信士女は經文を拜讀して無限の妙味を感誦し菩提の資糧を獲べきなり篤信者にして御注文の際は迅速發送致すべく候

發行所 慶印寺

東京市淺草區新谷町十四番地

日蓮聖人靈蹟寫眞帖 全

天地八寸五分巾一尺二寸五分綴子表紙大和

綴裝訂頗優美美術精巧寫眞版百十餘個箱入

◎ 定價金五圓

内地小包送料金貳拾錢

特價金三圓八拾錢

賣捌所 鈴木大次郎

東京市日本橋區濱町三丁目五番地

賣捌所 統一團

同市淺草區北清島町十四番地

○日蓮聖人を研究せんとすれば先づ其御遺文を読み
○御遺文を讀には必ず御遺文講義を左右に備ふべし○

日蓮聖人御遺文講義

○第壹卷より第五卷迄既刊每卷定價金參拾貳錢○

土曜講壇

○唯一佛教團長清水梁山師の講演にして佛教修養者必讀の冊子也

○毎月一回二十八日發行

壹部定價金貳拾貳錢
半年分 金壹圓
一年分 金貳圓

名古屋市東區高岳町二丁目百三十一番戶

發行所 唯一佛教團

廣告

今般左記ノ處へ轉居仕候也

明治四十三年十一月十五日

東京市神田區駿河臺東紅梅町貳番地

辯護士 松本郡太郎

爾今移轉地たる左記の所に於て執務致候條此段辱知諸君へ謹告仕候也

東京府下北豐島郡巢鴨町染井

蓮華寺 住職 松田宏繁

勤行作法

勤請文、勤行讀誦(方便品十如是自我爲)正行唱題
回向文、受持文、○自我爲讀誦
右は各派統一の理想の下に本多日生師の編纂せられたるものにして、勤請文、回向文の如き最も簡潔にして而も其要義を逸せず總振假名付なれば初心の行者の所用として最も適切なるもの今回本會に於て會員の爲めに印刷に付したるを以て其殘餘數百部は一般信徒の爲めに之を頒たんとす、御入用の方は前記代金を添へて御申込ありたし

發行所

東京市淺草區北清島町十四番地
妙教婦人會

毎月一回十五日發行、一部金六錢、税五厘、一ヶ月前金六拾五錢郵税六錢、代金ハ振替貯金口座東京二一七番へ拂込マレ
×此場合ニハ送料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

明治四十三年十一月十五日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

發行所

東京市淺草區北清島町十四番地
統團



正價三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれず此の種類數品有之候を以て一々記載する能は
諸君は、佛具正價發賣目錄を以て、速速運呈仕候。此の目錄を
御覽あれは、郵券四錢御送附後、下候に、速速運呈仕候。此の目錄を
御覽あれは、郵券四錢御送附後、下候に、速速運呈仕候。此の目錄を
御覽あれは、郵券四錢御送附後、下候に、速速運呈仕候。此の目錄を

佛具一切、過去帳の類、大般若經、一切藏經、理趣分、位牌、太
佛具金物一切、過去帳の類、大般若經、一切藏經、理趣分、位牌、太
佛具金物一切、過去帳の類、大般若經、一切藏經、理趣分、位牌、太
佛具金物一切、過去帳の類、大般若經、一切藏經、理趣分、位牌、太
佛具金物一切、過去帳の類、大般若經、一切藏經、理趣分、位牌、太
佛具金物一切、過去帳の類、大般若經、一切藏經、理趣分、位牌、太

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候

佛具卸部

京都市三條 本舖 三法堂藤田總次
通小橋西入

小賣部

同市三條 通大橋西入 三法堂佛具陳列場



統一



第一百九十號

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
明治四十二年十一月十五日發行第一號百九十九號
明治四十三年十二月十五日(每月一回十五日)發行

(每月一回十五日)

(東京 三島印刷株式會社 刷)